

## 1. 小学校におけるキャリア教育の現状と課題

- 約 8 割の学校がキャリア教育担当者を配置しており、小学校においてもキャリア教育推進への対応が進みつつある。しかし、担当者の多くがほかの担当との兼任であること、担当者が一人のみの割合が高いこと等の課題もある。(→A)
- キャリア教育の全体計画の作成は 6 割、年間指導計画の作成は 5 割程度の学校にとどまっている。児童の発達の段階に応じた系統的なキャリア教育の実践のため、指導計画の作成を推進する必要がある。(→A)
- 年間指導計画に「キャリア・カウンセリングが含まれている」割合は極めて低く 1 割を下回る。キャリア・カウンセリングは、単に卒業直後の進路決定のための相談ではなく、児童のキャリア発達を促す上で欠かせない個別支援であることを認識する必要がある。(→E)
- 「基礎的・汎用的能力」<sup>(\*)</sup>に関する教員の理解が不十分であり、キャリア教育に関する校内研修に参加したことがない教員も 6 割を超えている。学校全体での系統的なキャリア教育の実践に向け、キャリア教育の理解を共有するため、研修機会の拡充を図る必要がある。(→B)
- 児童の多くは、「友達の考えや気持ちを考えながら話を聞こうとする」など「人間関係形成能力」に関わる事柄について日常的に留意しつつ生活しているが、「キャリアプランニング能力」や「課題対応能力」に関わる事柄について留意して生活している児童は少ない。(→C)
- 9 割以上の保護者は小学校で職業や仕事について学習することを有意義だと捉えている。(→D)
- キャリア教育の新たな課題ともいえる「自己管理能力」、「課題対応能力」を向上させる上で、職業に関する学習やキャリア・カウンセリングの充実が効果を発揮する。(→トピックス)

### A 学校調査

キャリア教育の担当者は 83.9%の学校に置かれており、キャリア教育の推進が徐々に図られつつある。しかし、多くがほかの担当との兼任であり、担当者が一人のみの割合も高い。また、全体計画の作成は 63.4%、年間指導計画の作成は 46.7%の学校にとどまる。小学校においては、まずキャリア教育推進のための組織の確立、全体計画・年間指導計画等の作成を推進する必要があるだろう。

「キャリア教育を推進する上で重視したこと」では、「教育課程全体を通じたキャリア教育」が 62.3%と高く、全体を俯瞰した計画になるよう留意している一方で、体験活動の推進に関する項目は 2 割から 3 割にとどまっている。また、「取組の改善につながる評価」、「キャリア・カウンセリングを取り入れること」はほとんど重視されていない。日ごろ実践されている体験活動や評価、教育相談をキャリア教育のねらいと照らし合わせて見直し、計画として位置付けるよう促していく必要がある。

「キャリア教育の一環として行う諸機関との連携」では、「家庭や保護者（PTA の委員会などを含む）」「企業や事業所など」と「特に連携はしていない」と回答した学校が、ともに 3 割程度を占めた。小学校におけるキャリア教育では、家族や身近な地域の人々との豊かな関わりの中で、その一員であることを体験的に理解させることが求められる。家庭や地域などとの連携・協力を進めていくことが必要である。

## B 学級担任調査

「キャリア教育の推進が求められていること」は76.9%の担任が「知っていた」と回答している。しかし、「基礎的・汎用的能力」について、「詳しく知っている」、「ある程度知っている」は合わせて29.2%にとどまり、「聞いたことがない」が26.7%見られた。また、キャリア教育に関する資料や情報を「読んだことがない」が23.9%、キャリア教育に関する校内研修に「参加したことがない」が65.2%を占めている。キャリア教育の推進についての周知が進む一方で、キャリア教育を通して育成すべき力など、その理念や具体的な内容に関する理解は十分とは言えず、キャリア教育に関する研修も十分にはなされていない状況が見受けられる。

キャリア教育の計画・実施については、「全体計画に基づいて学級・学年の計画を作成している」は43.0%、「児童の発達の現状をふまえて計画を作成している」は35.1%にとどまっている。学校の特色や教育目標に基づいた全体的な方針を定めた上で、子供のキャリア発達を促す指導計画を作成することが必要である。

「キャリア教育について困ったり悩んだりしていること」としては、「実施時間の確保」、「キャリア・カウンセリング」、「評価の方法」などが上位を占めている。その一方で、「今後の重要課題」として、「キャリア・カウンセリングの充実」や「キャリア教育の評価」、「指導案の作成や指導案の工夫」といった項目を挙げる回答は少数にとどまった。「困ったり悩んだりしていること」を今後の課題として積極的にとらえ、実践の改善に結び付けようとする認識を広く共有できるよう、研修機会を拡充する必要がある。

「特に重点を置いて指導していること」を見ると、「役割や分担を考え、周囲の人と力を合わせて行動すること」や「不得意や苦手なことでも、進んで取り組むこと」など、「人間関係形成・社会形成能力」や「自己理解・自己管理能力」に関する項目で高い。一方、「自分の目標の実現に向かって行動すること」、「将来について具体的な目標をたて、実現方法を考えること」、「適切な計画を立てて進めたり、評価や改善を加えて実行したりすること」など「課題対応能力」、「キャリアプランニング能力」に該当する項目については低い傾向が見られた。

## C 児童調査

自分が将来就きたい職業について、80.2%の児童が「将来就きたい職業が決まっている」と回答している。職業を選ぶに当たっては、「興味や好みに合っている職業」「性格や能力をいかせる職業」など自己の適性を重視する傾向が見られる。

普段の生活では「友達の考えや気持ちを考えながら話を聞こうとする」など人間関係形成能力に関するものについてはよく意識されている一方で、「今学習していることと将来とのつながり」について考えるキャリアプランニング能力に関するものや、「知りたいことについて進んで調べようとする」課題対応能力に関するものについては、普段の生活の中では余り意識されていない。夢や目標をもつことの大切さを伝えながら、今の日常・学校生活における課題対応の機会を充実させていくことが求められる。6年間に及ぶ小学校在学期間中に、大きく成長する児童の発達の段階に応じて、身に付けさせたい基礎的・汎用的能力を明確にしながら、キャリア教育を推進することが必要である。

## D 保護者調査

キャリア教育の名称自体については「聞いたことがない」が73.6%を占めるが、多くの家庭で将来の生き方や進路について話し合っており、特に「上級学校のことや様々な職業のこと」については、77.8%の家庭で話題にされている。また、小学校で職業や仕事についての学習をすることを「有意義だ」と回答した保護者は9割を超えている。

義務教育終了後の進路選択の際には、「子供の適性や興味」、「夢や希望」を重視する傾向が見られ、「家族の就いている職業や仕事」については、余り重視されていない。学校教育に対する期待については、「自分の気持ちを整理して伝えること」、「周囲の人と力を合わせて行動すること」など、人間関係形成能力に関する内容が高く、「自分の将来について具体的な目標を立てること」、「将来の夢に向かって行動すること」などのキャリアプランニング能力に関する内容については、やや低くなっている。

保護者のキャリア教育に対する認知度は高いとは言えないが、潜在的な期待度は高いと考える。小学校においてはキャリア教育の充実と共に、その取組について積極的に地域・家庭に発信していくことが必要である。

## E 調査票間の比較—キャリア・カウンセリングに焦点を当てて—

キャリア・カウンセリングは、新たな環境や課題への不安を解消させ、勇気を持って取り組めるようにさせるための「対話」を通じた個別の支援である。言語的なコミュニケーションを手段として、キャリア教育の目標の達成に向けた働きかけを行うところに特徴がある。小学校においてもキャリア・カウンセリングは必要である。

しかし、学校調査において「年間指導計画」があると回答した学校のうち、「キャリア・カウンセリングが含まれている」と回答した学校は5.7%と低い（表1）。また、全ての学校に問うた「計画を立てる上で、重視したことがら」として、「キャリア・カウンセリング」を選択した割合は2.2%にとどまっている（表2）。同様に、担任調査において、「キャリア・カウンセリングを実施している」と回答した教員は4.7%と極めて低い（表3）。これらの結果からは、小学校ではキャリア・カウンセリングが「卒業直後の進路決定のための相談」と限定的に受け止められ、その大切さが十分に認識されていない可能性が推測される。

【表1】年間指導計画には、以下の内容が含まれていますか [学校調査]

（「年間指導計画を立てている」とした457校のうち）

選択項目	割合
キャリア・カウンセリング（全ての児童を対象にした相談活動）	5.7%

【表2】貴校が平成24年度のキャリア教育の計画を立てる上で、重視したことがらはどれですか [学校調査]（対象校976校のうち）

選択項目	割合
キャリア・カウンセリングを取り入れること	2.2%

【表3】あなたの学級あるいは学年における、キャリア教育の計画・実施の現状について、あなたが「そのとおりである」と思うものを全て選んでください [担任調査]

選択項目	割合
キャリア・カウンセリングを実施している	4.7%

しかしその一方で、学級のキャリア教育について「困ったり悩んだりしていること」を問う設問（学級担任調査 問6）に対して、学級担任の4割弱が「キャリア・カウンセリングの内容・方法がわからない」を挙げていることから、キャリア・カウンセリングの意義や方法に関する研修の充実によって、現状の改善が期待できるとも言えよう。

一人一人のキャリア発達を促す視点から小学校の教育活動を見直し、指導計画の一環にキャリア・カウンセリングを位置付けることによって、個に応じた実践の拡充に結び付けられるようにすることが重要である。

### 《トピックス》 職業に関する学習が自己管理能力や課題対応能力の向上を促す

「基礎的・汎用的能力」が提示されるまで、大多数の学校におけるキャリア教育の基盤として活用されてきたのは、国立教育政策研究所生徒指導研究センターによる調査研究報告書『児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について』（平成14年11月）が提示した「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）」に基づく能力論—いわゆる「4領域8能力」論—である。

この「4領域8能力」と今日求められる「基礎的・汎用的能力」には共通する要素が多いが、「基礎的・汎用的能力」における「自己管理能力」や「課題対応能力」は、「4領域8能力」には明示的に組み入れられておらず、これらの能力の向上を図ることは、キャリア教育の新たな課題の一つであると言える。

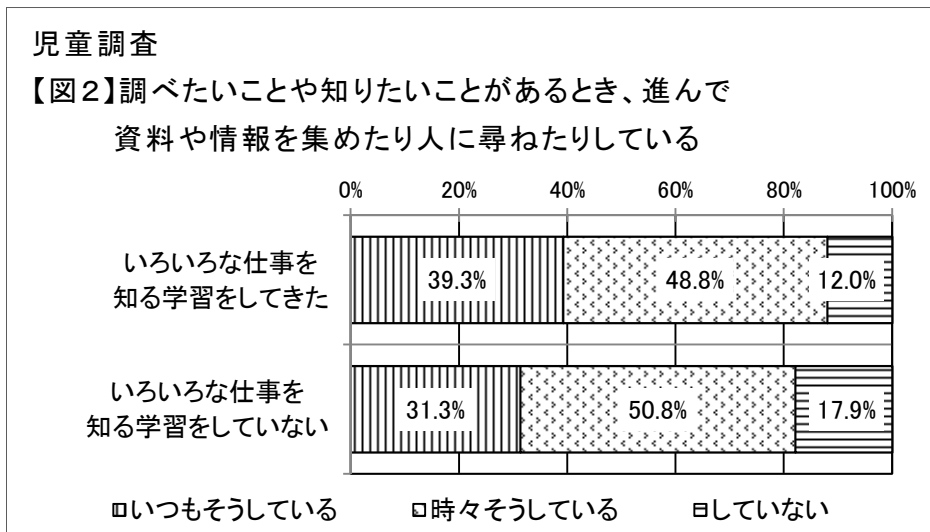
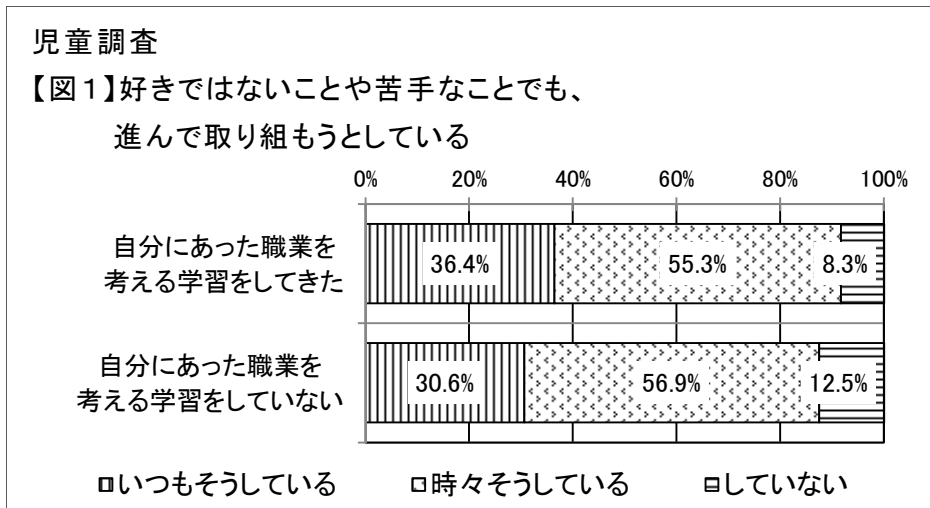
では、どのような学習活動が自己管理能力や課題対応能力を高めるのだろうか。

#### （1）自己管理能力や課題対応能力を促進する学習活動（児童調査より）

ここではまず、「普段の生活（授業中や放課後、家庭での生活）」を振り返ったときに当てはまるものを尋ねる児童調査（問5）の中から、自己管理能力を示す項目として「好きではないことや苦手なことでも、進んで取り組もうとしている」を、課題対応能力を示す項目として「調べたいことや知りたいことがあるとき、進んで資料や情報を集めたり人に尋ねたりしている」をそれぞれ取り上げた。次に、将来の職業についての学習活動（5項目）のうち経験したことのあるものを問う設問（問6）に注目し、各学習活動の有無により児童の自己管理能力・課題対応能力に違いが見出せるかどうかを分析した。0.1%水準で有意であった結果のうち、特に重要な示唆が得られるものについて整理したのが図1・図2である。

図1に示したように、「自分にあった職業を考える学習」に取り組んでいる方が「好きではないことや苦手なことでも、進んで取り組もうとしている」姿勢が強く、同様の傾向は「自分になりたい職業の内容について調べる活動」についても見られ、適職探索が苦手なものに取り組もうとする自己管理能力を高める可能性が示唆された。

図2に示したように、「いろいろな仕事を知る学習」は「調べたいことや知りたいことがあるとき、進んで資料や情報を集めたり人に尋ねたりしている」傾向を高めている。同様の傾向は、「お店や工場、農家や漁師の仕事など、様々な職業を見学したり体験したりする活動」「大人の人から職業についてのお話を聞いたり、質問したりする活動」についても見られた。仕事調べの学習が資料・情報を集めたり人に尋ねたりする課題対応能力を高める可能性を示唆していると考えられる。



## (2) 自己管理能力や課題対応能力の指導を促進する要因 (担任調査より)

次に、キャリア教育の実践と、今後の課題に関する教員の意識に焦点を絞り、自己管理能力や課題対応能力を高める指導を促進する要因を探ってみたい。

ここでは、担任する学級において「重点を置いて指導している」事項(問5)のうち、「不得意なことや苦手なことでも、自分の成長のために進んで取り組もうとすること」(自己管理能力)と「調べたいことがあるとき、自ら進んで資料や情報を集め、必要な情報を取捨選択すること」(課題対応能力)の2項目をとりあげた。次に、「学級でキャリア教育を適切に行っていく上で今後重要になると思うこと」を問う設問(問7)に列挙された15項目に注目し、今後の重要課題と考えている項目の違いによって、児童の自己管理能力・課題対応能力に関する指導の程度が異なるかどうかを分析した。0.1%水準で有意であった結果のうち、特に意味のある示唆が得られるものを整理したのが図3・図4である。

図3に示したように、「キャリア・カウンセリングの充実」(問7(6))を重要課題として認識しているほど、「不得意なことや苦手なことでも、自分の成長のために進んで取り組もうとすること」(問5(6))を「よく指導している」割合が高い。同様の傾向は、「諸計画に基づくキャリア教育の実施」(問7(3))や「キャリア教育を実施するための時間の

確保」(問 7(4))、「キャリア教育に関する指導案の作成や教材の工夫」(問 7(7))、「職場見学等の体験活動における受入事業所等の開拓」(問 7(11))、「学級のキャリア教育の計画・実施に対するほかの教員の理解と協力」(問 7(14))及び「キャリア教育の成果に関する評価」(問 7(15))についても見られた。これらの取組は、自己管理能力に関する指導を促進する要因であると推察される。

図 4 に示したように、「キャリア教育に関する指導案の作成や教材の工夫」(問 7(7))を重要な課題であると思うほど、「調べたいことがあるとき、自ら進んで資料や情報を集め、必要な情報を取捨選択すること」(問 5(7))を「よく指導している」割合が高い。同様の傾向は、「キャリア教育を実施するための時間の確保」(問 7(4))についても同様の傾向がうかがえた。これらの取組が、課題対応能力に関する指導を促進する要因である可能性が示されたと言えよう。

